# 《2013年11月例会報告》

【日 時】2013年11月22日(金)19:00~21:00(その後「ルン」~24:00ごろ)

【会 場】筑波大学附属高校 3F会議室(東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】スポーツを通した豊かな暮らし-青年海外協力隊、ケニアでの事例より-

【演 者】岸卓巨

【参加者(会員) 12名】安藤裕一(筑波大ハンドボール部 OB)、牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)、奥崎覚(会社員)、加納樹里(中央大学教員)、岸卓巨(青年海外協力隊 OB)、

小池靖(浦和文蔵サッカースポーツ少年団)、笹原勉(日揮)、嶋崎雅規(帝京高校)、

白髭隆幸(国際スポーツプレス協会会員)、関谷綾子(関谷法律事務所)、田中理恵(会社員)、 中塚義実(筑波大学附属高校)、

【参加者(未会員)4名】★成澤勇介(中央大学3年/FLP小林ゼミ所属)、★イヨンヒ、大和伸行 (ビバ!サッカー研究会)、国島栄市

注1)★は初参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】岸卓巨

# スポーツを通した豊かな暮らし

- 青年海外協力隊、ケニアでの事例より -

岸 卓巨 ( 元青年海外協力隊、サロン 2002 理事 )

<目 次>

- 1. 自己紹介
- 2. 青年海外協力隊とは
- 3. ケニアとはどのような国か
- 4. ケニアのスポーツ事情
- 5. ケニアでの活動内容
- 6. 質疑応答①
- 7. ケニアから見た「スポーツを通した豊かな暮らし」
- 8. 質疑応答②

## 1.自己紹介

中塚:皆さん、こんばんは。今日は岸君の2年間の活動の成果が映像と音楽とで紹介されるということですごく楽しみにしています。最初に簡単に自己紹介をしたいと思います。岸君は2年間日本にいなかったので、この会にどのような方が来ているかというのもよく分かっていないかもしれないので、自己紹介をお願いしたいと思います。

私は、先ほど理事会をやっていましたが、サロンの理事長の中塚です。筑波大附属高校の教員です。よろしくお願いいたします。

安藤: 筑波大学ハンドボール部 OB で中塚先生とは同じアパートに住んでいた安藤です。自分の母校 の OB 会の会長をやっていまして、サロンの法人化と照らし合わせながらやっています。よろしくお願いいたします。

小池靖:小池靖と申します。会社員ですが、サッカーとの絡みでは子どもたちのコーチをやっています。サロンには 1 年ほど前から参加させていただいています。会社とは別のところで、外国から日本に来て日本で勤務されている方とサラリーマンの集まりに去年 5 月くらいから参加していまして、毎回テーマを決めて 15 名くらいが集まるのですが、先日そこで「オリンピック開催国の市民として発信したいこと」というテーマで発表させていただきました。そこでサロンについて紹介させていただいたのがきっかけで本日その集まりから 1 名こちらに来ていただいています。私の隣にいますヨンヒさんです。今日はよろしくお願いいたします。

イヨンヒ:はじめまして、イヨンヒと申します。韓国から今年3月に来ました。日本語学校で日本語 を勉強しながら会社員をしています。小池さんから紹介いただいて参加しました。よろしく お願いします。

白髭:白髭です。中塚先生とはここの坂の下の出版社で高校サッカー年鑑というものを出しました。 こういう催し物があることは前から知っていましたが幽霊会員で、2年前にちょうど岸さんが ケニアに行かれた頃に会員になりました。最近、日本では「こんなところに日本人」のよう な番組をやっていまして、タンザニアやケニアも取り上げられることがあるのですが、実際 はどうなのか聞きたくて今日は参加しました。よろしくお願いいたします。

成澤:成澤勇介と申します。自分は今回初めて参加いただくのですが、私のゼミの先輩である岸さんから紹介いただきお邪魔させていただきました。自分は幼稚園の頃からサッカーをやっていまして、中央大学サッカー同好会というところで今でも現役でサッカーをやらせてもらっています。このサークルの関係で、現在浦和レッズのボールボーイの運営を行っていまして、サッカーについてもいろいろ学べればと思い参加しました。よろしくお願いします。

関谷:静岡から来ました関谷と申します。岸さんとは私がちょうどサロンに入った頃に、皆さんのことがまだ分からない中で岸さんにすごく親切にしていただきあたたかい気持ちになったことを覚えていまして、岸さんが久しぶりに帰って来られるということで、岸さんの顔見てお話聞きたいと思って来ました。日帰りですのでルンには行けないのですが、岸さんが2年間のうちにすごく逞しくなっていて、私の2年間の変化といえば老眼鏡が必要になったことくらいかなと思ってしまいました。よろしくお願いします。

加納:加納樹里と申します。中央大学で教員をしています。中塚先生とはサッカー研究会からの長年のつながりで、岸さんとも教えたことはないのですが、中央大学の学生だったということでいるいろなところで繋がりを持っています。先ほど日帰りという話がありましたが、私も普段は家が東京の外れなのでルンに顔を出してもすぐに帰らなければいけなかったのですが、今日は明日サッカーの試合がこちらの方であるのでもう宿をとってきました。気合を入れてきましたのでよろしくお願いします。

大和:大和伸行と申します。牛木素吉郎さんのビバサッカー研究会に所属しています。以前熊野に中塚先生に連れて行っていただきまして、中村覚之助さんの足跡を辿りました。今日たまたま渋谷の牛木さんの事務所に顔を出しましたら今日の会を紹介いただき参加させていただきました。何の偶然か甥がソロモン諸島で協力隊として活動しておりまして、その一端にも触れたいなと思っております。よろしくお願いします。

牛木:牛木でございます。サロンに参加するようになってもう長いですが、今話のあった和歌山で中村覚之助という日本で 1 番はじめにサッカーをした人のシンポジウムをやりました。その報告書として手の込んだ、やっかいなものを作ったのですが、その時に岸君と一緒にやりまして、なかなか判断が早くて、柔軟で、実行力があるなと非常に感心しました。よろしくお願いします。

島崎:帝京高校で教員をしています島崎と申します。岸君とは今日久しぶりに会いまして、途中経過はプログを通じて見ていたんですが、今日は直接話が聞けるということで楽しみにして参りました。よろしくお願いします。

中塚: それでは、岸君、お願いします。

岸:皆さん、こんばんは。岸と申します。お忙しい中多くの方に来ていただき感謝いたします。2年 ぶりですが、ほとんどの方とは既にお会いしたことがあり、私も久しぶりに皆さんにお会いできるのをとてもうれしく思っております。はじめての方もいらっしゃいますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。岸卓巨と申します。1985年に豊島区で生まれましたので、ここはまさに私の地元です。現在、豊島区で総合型地域スポーツクラブを父が運営しているのですが、そのスポーツクラブで母親もヨガを教えているということで、この両親に育てられたからこそ今の自分がいるんだなと思うことが時々あります。

高校は都立小石川高校に進みました。サッカー部在籍中に、私はサッカーがうまくはないため、部の中で自分の居場所を作ろうと、審判をやったり、部のマネージメントをやって、他の部員とは少し違った目立つ存在だったようで、中塚先生がチェアマンを務める DUO リーグに小石川高校として参加している時に、中塚先生に声をかけていただきました。そして、DUO リーグの運営に携わるようになり、サロンにも入れていただきました。

中央大学在籍中に、私の担当教授が元青年海外協力隊だったということで、バヌアツ共和国というオーストラリアの近くの島国を紹介していただき、通算で 2 ヶ月ほど行ってきました。その時の話は以前サロンの月例会でもさせていただいたので本日は省きますが、その時に途上国のおもしろさを感じたことが今に繋がっています。

その後、日本公文教育研究会という公文式をフランチャイズ経営する本部でエリアマネジャーのようなことをして働いていましたが、辞めまして中央大学の大学院に入学しました。公文式は辞めたのですが、公文式の学習法自体は非常に良いと思っていて、ケニアでもその時の経験

を活用しました。

そして、大学院を休学して青年海外協力隊に2年行ってきたという流れです。ケニアでは、後ほど詳しくお話しますが、リマンドホームという児童保護拘置所で子どもたちに勉強やスポーツを教える仕事をしておりました。また2年目には、リマンドホームで活動する傍ら、子どもたちの居場所づくりとして、ケニア人とともにサッカーを中心とした日本ではNPOにあたる団体を立ち上げました。

本日は、「青年海外協力隊とは」「ケニアとはどのような国か」「ケニアのスポーツ事情」「ケニアでの活動内容」「ケニアから見た「スポーツを通した豊かな暮らし」」という順でお話させていただきます。現在サロンでは法人化の議論が進んでいますが、そもそもサロンの理念である「スポーツを通した豊かな暮らし」について皆さんはどのようなことを考えられているかについて、最後に時間があればディスカッションさせていただければと思っております。

# 2. 青年海外協力隊とは

はじめに、青年海外協力隊とは何かについて新聞などではあまり表に出てこないことを含めて紹介させていただきます。

まず、人数についてですが、青年海外協力隊は 20 歳から 39 歳まで応募でき、現在 71 か国で 2,000 名がさまざまな職種で活動しています。私は、青少年活動という職種で行きましたが、私が住んでいた町には他に環境教育という現地の学校を回って自然の大切さについて子どもたちに教える仕事や、コンドームの普及などエイズ対策の仕事をしている隊員がいました。JICA では青年海外協力隊の他に、シニア海外ボランティアという制度を設けていて、こちらは、40 歳から 69 歳までの人が応募でき、61 か国で 500 名が現在活動しています。青年海外協力隊に比べて日本での経験を活かして、品質管理や専門学校の先生など専門的な仕事をしている人が多いので、もし皆さんも興味がありましたら調べてみてください。

現在、新聞などでも応募者が減っているというニュースが出ているようですが、応募者が少なくても健康診断や人物面接などで落とされることも多いようです。この応募者が減ってい要因として、私が大きな要因になっているのではないかと思う理由は、お金があまりもらえなくなったということです。協力隊員には、現地で生活するために現地の銀行口座に振り込まれる現地生活費・日本の口座に毎月振り込まれる国内積立金・帰国後無職などの場合に進路を決めるまでのつなぎのお金になる進路準備金の主に3つのお金が協力隊には払われるのですが、私がケニアに行く前に盛り上がっていた民主党による事業仕分けで大きく削られてしまいました。かつては、協力隊に行って帰って来るとそれだけで貯金が200万円くらい貯まっていたようですが、今はそんなことはありません。ケニアの場合は、現地生活費は約3万円で私が住んでいた町はイタリア人のビーチリゾートが近かったためお金を使おうと思えば使えるところがたくさんあり、かなりカツカツの生活でした。国内積立金は月5万円程度ですが、ケニアには旅行したくなる国立公園などもたくさんあるため、そのような時に使っていると本当に仕分け前がうらやましくなることがあります。

協力隊は定期的に報告書を JICA に提出しなければいけないのですが、決まっていることは配属 先と報告書の提出くらいですので、かなり活動の自由度は高く、いっぱい働こうと思えば働ける一方で、サボろうと思えばサボれる。協力隊自身に委ねられている部分がかなりあります。

# 3. ケニアとはどのような国か

皆さんは、「ケニア」と聞いてどのようなイメージを持たれますか?場所は、東アフリカ。人口は 4000 万人で日本の 3 分の 1。面積は日本の約 1.5 倍ですので、日本よりも広い土地により少ない人々が住み、人が住んでいない場所が多くあることが想像できます。





野生動物が見られるサファリツアーに行くと、このような光景が広がります。国立公園には、寝室から動物が見られるような高級ホテルもたくさんあります。日本からも年に5,000 名程度の観光客がケニアを訪れていますが、多くの方はナイロビに到着し、サファリで動物を見るだけで日本に帰ります。そんなナイロビも、高層ビルが立ち並ぶエリアもあるかと思えば、そこから車で10分も行けば1日1ドル以下で生活するような人々が住むスラムエリアがあります。





ここまでは、日本人にもわりと知られた部分ではないかと思います。ちなみに、日本でも9月末にナイロビのスーパーで起きたテロについては報道されたかと思いますが、私もその時スーパーの近くにいました。ちょうどテロが起きた日に日本人学校でお祭りが行われ日本人の多くはそのお祭りに参加していたため、日本人でテロに巻き込まれる人はいませんでしたが、このスーパーは私も



よく行っていた場所ですし、これまでのテロが地元の人をターゲットにしたものだったのに対して、この時は観光客も巻き込まれる場所で起きたということで非常に衝撃的でした。

私が住んでいた場所は、このナイロビから 500km 程離れたインド洋に面したマリンディという町です。ナイロビから飛行機で行けば1時間で着きますが、バスだと12時間くらいかかります。はじめの頃は飛行機も使っ

ていましたが、現地の生活に馴染んでくると飛行機代の片道1万円が非常に高く感じ、バスを多く利用していました。この町には、非常にきれいな海が広がっています。日本人にとってはケニアの海というのはあまり想像がつかないかもしれませんが、マリンディはイタリア人がバカンスを過ごす町になっており、8月や1月はイタリア人の旅行者でとても賑わいます。イタリア料理屋やイタリア人経営のホテル、クラブ、カジノなどもあり、お金を使おうと思えば、いくらでも使える町です。海には、マングローブ林もあり、時期によってはフラミンゴが飛んできます。

海沿いはケニアの中でも1番外からの文化が入って来やすい場所ですので、アラブ文化とイスラム文化が混ざったスワヒリ文化というケニアでも特有の文化が今でも色濃く残っています。遺跡が残っていたり、料理もケニアの内陸部に比べて種類が豊富で、おいしい料理がたくさんあります。





料理は、このようなものを食べていました。 左上はケニア版ピラフ。その下にある白いもの が、ウガリというケニアで最も一般的な主食で す。とうもろこしの粉を沸騰したお湯に入れて 混ぜていくと、固まってきます。このウガリを 主食にキャベツを炒めたものやビーフシチュー のようなものなどを食べます。右上の写真の緑 色の野菜は、日本では青汁などに使われている ケールです。ケニアでは炒めて食べます。右下 の写真は、ビリアニという私がケニアで最も好 きだったスワヒリ料理です。サフランライスの ような色のついたご飯に、カレーのようにルーを かけて食べます。ルーの中に入っているかたまり は鶏肉です。ケニアで2年間活動するにあたって、 食べ物がおいしかったのは良かったなと思います。 ただ、おいしいと言っても種類は日本ほど多くな いですし、日本食ほどはおいしくないので、ケニ アに行って少し痩せたのですが、日本に帰ってき て一気に元に戻りました。

私は治安の問題もあり鉄筋のセキュリティが比較的整った家に住んでいましたが、少し出かけると土づくりの家もあり、そのようなところで地元の人たちと一緒にウガリづくりなどもやっていました。





次に、いくつか数字をあげながら、ケニアの概要について紹介させていただきます。 はじめの数字はこちらです。

## 64.8% 0.7%

これは何の数字だと思いますか。これは携帯電話の普及率と固定電話の普及率です。マサイ族でも原野の中で使う程、携帯電話は普及しています。一方で、固定電話はほとんど普及しておらず、そもそも送電線があって家で夜でも電気が付けられる家庭はケニアの中で 2013 年現在 13%しかありません。この携帯電話ですごいのが MPESA というサービスです。これは携帯電話を使った送金システムです。現金と MPESA 登録した携帯電話を持って、写真にあるような MPESA スタンドに行くと携帯電話内の口座にお金をチャージすることができます。そして、チャージしたお金は携帯電話の操作で、別の人に送ることができます。お金を送られた人は携帯電話と身分証明書を持って身近な MPESA スタンドに行き、現金を受け取るという仕組みです。銀行は農村部にはあまりなく、口座維持費も高いのに対して、MPESA スタンドは日本のコンビニのようにどこにでもあるため、都市部に出稼ぎに行った人が村に残る家族に仕送りをしたり、私も電気料金の支払いなどに使っていました。



インターネット環境も予想以上に良く、スマートフォンをモデムとして使い、わりとどこに行ってもインターネットができます。私はケニアでの活動中に仙台市にある元避難所とスカイプでケニアの人々を繋いで東日本大震災から1年の追悼式を行いましたが、ケニアの子どもたちが練習して歌う「上を向いて歩こう」に合わせて、日本にいる人々が手拍子を送り、非常に心あたたまる時間を作ることができました。もしかしたらモバイル環境については、日本よりも良いのではないかとさえ思います。

次の数字はこちらです。

## 85% 75%

これは、小学校就学率と中学校就学率です。ケニアでは小学校8年間、セカンダリーと呼ばれる中学校兼高校4年間の8・4制ですが、子どもたちのうち85%は小学校に通うことができ、小学校卒業生のうち75%は中学校に通っているということです。小学校に通えない子どもが15%いて、小学校から中学校に上がる段階で25%はドロップアウトするという状況ですので、協力隊員がケニアで活動する中でも、学力や人格的にはとても優秀なのに学校に通えない子どもに出会うことはたびたびあります。小学校が学費無料なのに対して、中学校は学費がかかるということで、現

在協力隊有志で KESTES という学力は優秀だがお金がなく中学校に通えない子どもを支援する奨学金制度を運営しています。この奨学金制度は今年で30年目になる制度で、日本では協力隊OBがファンドレージング活動をしたり、ケニアでもイベントの際にTシャツを売ったりしながら奨学金を確保しています。この数字は、ケニアの全国調査の結果ですが、中には学校に在籍していても、その学期のPTA費や学校運営費が払えないからと、学校に行っても家に帰される子どももいますので、この数字からだけでは子どもたちが置かれている厳しい環境はなかなか分からないと思います。

KESTES (ケステス) ホームページ: http://jocvkestes.wordpress.com/

89% 8% 3%

こちらは宗教についての割合です。ケニア人の89%はキリスト教、8%はイスラム教、3%は伝統宗教を信じています。私が住んでいた町は海沿いでアラブ人なども多く移り住んでいるため、内陸部に比べてイスラム教徒の割合が高く、街中にはモスクがあり、私が働いていた施設でもこのように頭から布をかぶって働いていた同僚やイスラム教徒の子どもたちがいました。帰国前の9月に日本人の大学生などから参加者



を募集してワークキャンプを行いましたが、その際にイスラム教徒の家にホームステイした女子大学生が、「日本でニュースを見ているとイスラム教は危険だというイメージを持ってしまうが、実際はとてもやさしくてイスラム教に関する考え方がとても変わった」と言ってくれたのがとても印象的でした。伝統宗教については、今でも占いの結果で人生の選択をしたり、伝統的な医療を信じている人もいます。

## 40以上

これは民族の数です。ケニア人と聞いてマラソン選手をイメージされる方も少なくないと思いますが、私が住んでいたマリンディにはマラソン選手はほとんどいません。足が速いかどうかも分かりません。マラソン選手は、キクユ族・カレンジン族などケニア山の麓の高地に住んでいる民族から多数輩出されています。一方で、マリンディを地元とする民族はギリヤマ族と呼ばれる民族で、私が働いていた施設でもギリヤマ族の号どもが1番多くいた施設でもギリヤマ族の特徴は、ダンスが好きと言われています。そして、あたたかいエ



リアですので、内陸部の寒くなる時期もあるエリアに住む人に比べて、のんびりした気質でもあります。一緒に働いていると、のんびりしすぎている同僚にイライラすることも多々ありました。その他、カンバ族、ポコモ族などケニア人と一括りにされる中に全部で 40 以上の民族が含まれます。

5年毎に行われる大統領選挙が今年3月に行われ、前回選挙の時に非常に荒れたため、今回はケニアで活動中の全協力隊が安全のためにナイロビのホテルに2週間ほど集められましたが、選挙が荒れる原因もこの「民族」です。政策による対立ではなく、民族による対立になります。幸い今年の選挙は前回からの教訓もあり、平和裏に終わりましたが、部族意識は非常に強いものがあります。

ポコモ族の黄色いTシャツを着た人は、ジローさんという私がケニアで働きはじめた時の同僚です。日本でも働けるのではないかと思う程、よく気が付く人で、ケニア生活にまだ慣れていない私にとって、ジロー先生の存在は本当に大きな助けになりました。

そのような国で、日本人のイメージはと言いますと、ケニア人の中には日本は中国の中にあると思っている人がいると言っても過言ではないほど、中国の方が大きな存在感を示しています。それにはいくつか理由があるかと思いますが、日本のアニメや漫画は全く見かけない一方で、中国のカンフー映画は大人気です。私が歩いていて「チャイニーズ」と呼ばれるのはまだ許せますが、「チンチョンチャン」とカンフーの真似をしてバカにしてくるのには腹が立ちます。

中国の存在感が大きい別の理由は、ケニアの公共事業に対して中国企業が積極的に参入していることです。写真の道路は、中国が建設した高速道路です。この道路ができたことで、郊外の町からナイロビへ非常にアクセスしやすくなりました。しかし、ケニア人が中国に対して良い印象を持っているかというと、むしろ逆で中国に悪いイメージを持っている人の方が多いように感じました。

# 日本人のイメージは?

政治家に賄賂を払って公共事業を受注し、いざ工事を始めると自国から労働者も連れてくるということで、ケニア人の雇用が生まれない。どこまで本当の話か分かりませんが、ケニア人の特に仕事がなくて困っている人たちは、このような印象を中国人に対して抱いているようです。

そのような中国人の方が知名度が高いケニアにおいて、最も知られている日本人は、マンチェスターユナイテッドでプレーしている香川選手、インテルでプレーしている長友選手かと思います。ケニアでは、ケニアの国内

リーグ以上に、ヨーロッパのサッカーリーグが人気で、テレビのある場所に試合の日には人だかりができるような状況です。そのため、日本人の長友選手や香川選手も知られているというわけです。

## 57.1歳

こちらはケニア人の平均寿命です。そして、この赤ちゃんは ジローさんという私の同僚の子どもです。ジローさんは、私が リマンドホームに配属された当初からリマンドホームにいるス タッフで、年齢が近いこともあり、ケニアにまだ慣れていない 私にさまざまなことを非常に親切に教えてくれました。彼がい たからこそ、スムーズに活動を始められました。そんなジロー さんのはじめての息子。生まれた時も、真っ先に「生まれた よ!!オーシャンって名づけたよ」と私に電話をしてきてくれ



ました。しかし、生まれてからも成長せず、手足に力が入りません。まずは地元の公立病院に行きましたが、それでも良くならず、私がお金を出して公立病院よりもレベルの高い私立病院に通わせました。ちょっと元気になってきたかなと思っても、やっぱり手足に力が入らず、弱弱しい様子は変わり

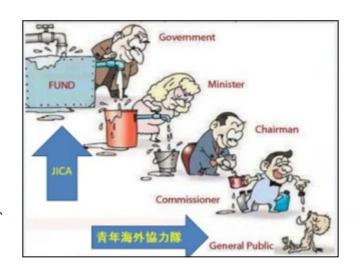
ません。そこで、再び病院に行ったところ、入院が決まり、しかも高度治療室という場所に入れられました。しかし、高度治療室と言っても、ケニアの病院は日本の村の診療所以下だと思います。処方箋を書いてもらっても、その薬は町のどこを探してもない。脈拍や点滴など日本だったら機械で管理される部分も、停電の多いケニアにおいては、すべてが人の手で管理されるため、常に人手不足。酸素ボンベを使いたくても空。そのような状況の中でオーシャンは生後5ヶ月にして亡くなりました。

ケニアには高齢者もたくさんいます。100歳を過ぎた人もいます。しかし、なぜ平均寿命が低いかといいますと、オーシャンのように産まれてからすぐに亡くなってしまう子どもが多いためです。生後1年未満で亡くなる子どもが日本では0.3%なのに対して、ケニアでは5.5%という統計データも出ています。このような状況が少しでも改善されればと思います。

- 1位 シンガポール
- 2位 香港
- 3位 オーストラリア
- 4位 ケニア
- 5位 アメリカ
- 6位 日本

これは、何のランキングだと思いますか。首相・大統領の給料ランキングです。現在は、ウフルケニアッタという独立時に大統領であったジョモケニアッタの息子が大統領を務めていますが、このランキングからも分かるように、ケニアは決してお金がない国ではありません。この国の問題をまさに表しているのがこの図です。お金が国に入って来ても、政府、大臣、都知事、市区町村長、議員など

下りてくる中で、どんどん中抜きに合い、一般市民に下りてくる頃には、はじめは大量にあったお金も、ほんのわずかになってしまう。そんな様子を水で表しています。海外からの援助も、ただその国にお金を入れるだけでは、お金を持っている政治家などがよりお金持ちになるだけで、一般市民にとっては何のメリットもありません。青年海外協力隊の場合、JICAはケニア政府とやり取りをしていますが、青年海外協力隊は底辺に位置付けられる一般市民を相手に活動していきますので、より有効な支援ができると考えています。このような状況は、ケニアに限らず多くの途上国に共通した問題かと思います。



## ここまでの話をまとめますと、

#### ケニアとは

- ・思ったよりも近代化していて、教育を受けている人の数も多い、お金もあるところにはある国だが、社会システムに大きな問題を抱えた国である。
- ・青年海外協力隊がともに活動しているのは、その悪い社会システムのしわ寄せにあっている一般 市民。

このような国で実際に働いてみると、いろいろなカルチャーショックもありました。

#### <カルチャーショック>

## 時間を守らない

例えば、9時開始のミーティングでも9時の時点で来ているのは出席予定者30名のうち2名程。1時間経ってやっと来る人が半数くらい。電話をした時に「忘れてた」と言われることもよくあります。これからお話するグループの保護者会などでは、せっかく早く来た人が損しないように、かといって早く始めても同じ話を2回しないといけなかったりするため、早く来た人には活動の写真をプロジェクターを壁に映し出して、スライドショーで見られるようにするなど早く来た人が得をする工夫をしていました。

#### 何かあったら神頼み

日本人であれば何か失敗した時やうまくいかなかった時はなぜうまくいかなかったかを考え、自分なりの改善のための努力をするかと思います。しかし、ケニア人は何かあるとすぐに神にお願いします。「神様が助けてくれる」。宗教を否定することはできませんが、一緒に働いていると「自分でがんばれよ」とイライラすることもたびたびあります。

#### より上を目指さない

これはアフリカの農民の習慣でもあるようですが、ある程度のレベルに行くとさらに上を目指さないということがあります。農家では、ある程度の量の作物が取れれば、それ以上収穫するための努力はせず、他の仕事でもある程度やればあとはのんびりしています。持続可能な生活をするためには必要な考え方なのかもしれませんが、子どもたちを留めておくことを第一の目的としているリマンドホームにおいて、子どもたちを問題なく留めておいているから十分と、子どもたちが手持ちぶさたにしている横で、同僚が携帯電話や新聞を見ている様子を見ると子どもたちの時間が非常にもったいなく感じ、私は常に何ができるかを考えていました。

#### もらって当たり前

お金がある人はない人にあげて当たり前、ない人はある人からもらって当たり前。ケニアの一般 市民と接していると日本人である我々はお金を持っている方ですので、すぐに奢ってくれと求め てきます。そして、奢ってあげても「ありがとう」を言わず当たり前だと思っている様子を見る ととても腹が立ちます。これは、日本人に対してだけではなく、ケニア人の中でも親戚の中に稼 ぎの良い仕事をしている人がいると親戚全員がその人に依存したりします。しかし、このもらっ て当たり前という発想は、ケニア人の中では、家族や同じ民族の中だけで当てはまるようで、政 治家が貧しい人たちを助けようという発想にはなかなかなりません。

## 決めつける

私が道を歩いていて、「中国人」と呼ばれるのがなぜ嫌かと言いますと、「中国人」だと決めつけられることが1番腹が立ちます。日本で黒人を見たら、「アフリカ人」と呼ぶことはあっても確信がないのに「ケニア人だ」「エチオピア人だ」と決めつけることはしないと思います。しかし、ケニアにおいて「アジア人だ」と呼ばれたことは1度もありません。これは、地理の知識がないという理由だけではないと思います。また、日本にはウガリがないというととても驚かれ、彼らはどこの国にもウガリがあると決めつけています。

## 体罰

私がケニアに行っている間に日本でも話題になったようですが、体罰をする同僚とは私もケニ アで戦っていました。体罰をされて育ってきた同僚に、体罰を使わない指導を求めることは非常 に厳しいことかもしれません。しかし、体罰の何がまずいかと言うと、体罰をしてそれで解決す ると大人も子どもも思っていることです。例えば、私は日本の皆さんからもサポートをいただき、 リマンドホームの中に図書室を建設しました。リマンドホームは窃盗の容疑で拘置されている子 どももいますので、図書室から無断で本を持ち出したり、備品を盗む子どもがいます。そのよう な時に、ケニア人のスタッフはその盗んだ子どもを棒で叩いて、その件を終わりにします。しか し、同様の盗みはその後も繰り返されます。さらに、驚いたことに子どもでも、「先生、許し て」と言いながら、「私を叩いて終わりにして」と体罰を求めて来る子どもがいます。しかし、 叩いても状況は改善されません。そこで私は、このような盗みが起きた時には、「どうしたら盗 まないか、どうしたら盗みが起きないか、皆で考えて。考えるまで図書室使用禁止」と子どもた ちに自分たちで考えることを求めました。すると、「ものを借りる時は貸出ノートに名前を書く ようにしよう」「図書係をつくろう」と子どもたちの方からアイデアが生まれてきます。この考 える機会を奪ってしまうことに私は体罰の問題性を感じていました。体罰を行う同僚には、その ことを時には口論になりながらも伝えてきたため私の活動後半ではほとんど体罰はありませんで したが、うるさい私が帰国して再び体罰が始まっているかもしれません。

このような環境の中で、腹が立つこと、ストレスが溜まることもたくさんありました。しかし、 一方で日本にはない良さもたくさんあります。

#### <日本にはない良さ>

## 雄大な自然

地平線が広がる草原に大きな野生のゾウやライオンが歩いている様子を見ると感動を覚えます。草原だけではなく、富士山よりも高いケニア山という山や、私が住んでいたエリアには青いインド洋が広がっています。マングローブ林が残っている場所もあります。しかし、ゾウやライオンは、国立公園にはいますが、なかなかエリアによっては人々が住む場所には出てきません。したがって、旅行者の方が地元の人々よりそのような動物を見ているとも言えます。その結果、ローカルなケニア人が自然を守るということを考えずに、ゴミのポイ捨てをしてしまうということも見られます。しかし、自然はケニア人にとっても観光という収入源を生むものであり、生態系が壊れることで畑などに動物の被害を受ける地域も出てきます。ぜひこれからさらにケニア人が綺麗な自然を自分たちのものと考えて、守っていってくれるようなシステムができればと思っています。

#### 文化(音楽、食、布、、、)

ケニア人は音楽が大好きで生まれ持ったリズム感があります。リマンドホームにいた子どもたちも自分で歌を作っていました。また、私が住んでいた町では海沿いでイスラム文化やアラブ文化も入ってきやすい場所ですので、そのようなさまざまな文化が混ざり合ってできたスワヒリという文化があります。ケニアで話されるスワヒリ語もここが発祥の地だと言われ、内陸部にある首都ナイロビよりもきれいなスワヒリ語を話します。またおいしいものもたくさんあります。その中で、私は別の元ケニア隊員とともにカンガという布を日本に輸入して販売しています。そのまま布としても販売していますし、カバンなどの製品にしても販売しています。よろしければインターネットでカンガ屋 katikati と検索してみてください。 http://katikati-kanga.com/

## <u>ゆっくりとした生活</u>

ゆっくりしすぎていると感じることはありますが、日本に帰ってきて1分遅れただけ で謝る電車に乗っていたり、余裕がなく暮らしている姿を見ると、ケニアのゆっくりとした生活が恋しくなります。

## 生きる力

日本でも生きる力を育む教育が目指されているようですが、ケニアの子どもたちの生きる力も 見習うべきところがあると思います。子どもたちでもトリやヤギを捌けたり、日本ではとっくに 捨ててしまうようなものでも修理して使っています。より良い生活をするためには彼らも学ばな ければいけないことがたくさんありますが、彼らのスラムで1日100円以下しか使えない生活を していても、笑顔を見せる彼らのたくましさは本当にすごいと思います。

#### 広がるマーケット

日本では高齢者が多いのに対して、ケニアは子どもが多く、これから大きな伸びしろのあるマーケットになっています。Honda がバイクの自社工場をケニアに作ったり、日清もケニアでカップヌードルを販売し始めました。これからますますケニアやアフリカに進出してくる企業があるのではないかと思います。私もこの2年間で築いたネットワークを活かしてケニアと関連のある仕事ができればと思っています。

## 4. ケニアのスポーツ事情

次はケニアのスポーツについてお話します。ケニアでは、サッカー、マラソン、バレーボール、ラグビーが主なスポーツですが、はじめに、「ケニア人にとってのスポーツとは」という観点からさまざまな種目に共通する点についてお話してから、各種目の特徴についてお話します。

まず、全種目に共通することですが、1番大きなことはスポーツが夢を描けるものになっているということです。ケニアはコラプション社会ですので、通常は誰か知り合いが偉いポジションについているか、コネがないとなかなかいい仕事を得ることができません。それに対して、スポーツは、海外からスカウトが見に来た際に彼らの目に止まったり、オリンピックなどの世界大会で良い成績を出せば、海外に出ていくことができます。ケニア人にとって、海外に出ていけることは成功の道を意味し、海外への道筋が見えやすいスポーツは、ケニアの人々にとってより良い人生を送るための手段として考えられています。しかし、スポーツの世界に全くコラプションがないかというとそんなことはなく、実力はなくても協会関係者の親戚が代表選手に選ばれたり、審判が明らかに偏った判定をすることもあるようです。それでも、記録や勝敗は比較的目に見えやすいため、他の職業に比べたら誰にでもチャンスがあると考えられているようです。

#### <サッカー>

次にサッカーについて説明します。まず、「見る」スポーツとしてのサッカーについては、ケニアの国内リーグよりもヨーロッパリーグの方が人気があります。「自分はチェルシーのサポーターだ」「アーセナルを応援している」など贔屓のチームを決めている人も多く、職場などでの話題でも、ケニアの国内リーグよりもイングランドのプレミアリーグの話題が出ることが多いように思います。マ

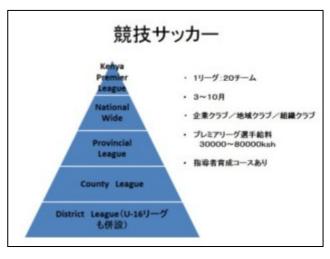


タツと呼ばれる乗合の車でも、ヨーロッパのサッカーチームのロゴやカラーで飾られた車がたくさんあります。

この写真はナイロビのスタジアムにサッカーのトップリーグを見に行った時の写真です。ケニアのトップリーグは、もともとイギリス領だったためか、プレミアリーグと呼ばれています。右上の写真は、チケットを買う場所です。1日に続けて2試合行われることも多く、1回チケットを買えば2試合見られるということも多いようです。このスタジアムはケニアのスタジア

ムの中では珍しくナイター設備が付いていますが、このライトも最近ついたということで、それまでは、昼間の試合しか行われていなかったようです。この見に行った日は、何度もリーグチャンピオンになっているタスカ FC というビール会社のチームの試合でしたが、観客席には空席が目立っていました。

次に「する」スポーツとしてのサッカーについてですが、マラソンが高地のエリアなど行われているエリアが限定されているのに対して、サッカーはケニア国内で最も全土で楽しまれているスポーツかと思います。社会人サッカーは右図のようなピラミッド組織になっており、それぞれのリーグは20チーム程で構成されています。シーズンは3~10月、チームには企業クラブ、地域クラブ、組織クラブの3種類があります。地域クラブの中には、例えば Mathare Youth Sports Association と呼ばれるケニア最大級のスラムエリアに住むマザレスラムの人々で作られたチームがあります。こ



のクラブは、そのエリアで清掃活動を行った際に参加したチームにポイントが与えられるようなユニークな試みをヨーロッパからの支援も入って行っていて、私が現在大学院で研究している「スポーツを通した開発と平和(Sports for Development and Peace)」の分野でも注目されているクラブです。私もマリンディでケニア人サッカーコーチとともに、子どもたちの健全育成と居場所づくりのためのサッカークラブを作りましたが、ケニアのサッカー界には、サッカーを地域開発の手段として考え、実践している地元の人たちもたくさんいることに驚きました。さらに、彼らの多くが無職であり、修士論文では、自分たちが厳しい生活をしながらも、子どもたちのためや地域のために活動している彼らにスポットライトを当てたいと思っています。ちなみに、プレミアリーグの選手の給料は3万シリング~8万シリングであり、私の同僚の給料が1万シリング弱ですので、比較的良い給料をもらっているようです。また、指導者については、資格制度があり、その資格を取得するための育成コースも行われているようです。

#### **<マラソン>**

次にマラソンについてお話します。駅伝番組や世界陸上を見ていると、ジャマイカ・エチオピア・ケニアの人は全員足が速いような錯覚に陥りますが、少なくともケニアについては全員がマラソンをやっているわけではありません。マラソンはケニアの誇りであると考えている人はケニア人の中でも多いかと思いますが、私が住んでいた海沿いの海抜のメートルのエリアにはほとんどマラソン選手はいません。世界で活躍するケニア人ランナーは大抵ケニア山の麓の常に高地トレーニングをしているようなエリア出身のキクユ族かカレンジン族です。このエリアには、マラソン選手の卵が共同生活を

しているキャンプや、海外の陸上選手も来てトレーニングを行う立派な設備の整ったトレーニングセンターがあります。右上の写真の建物は国際オリンピック連盟のトレーニングセンターです。左下の写真の1番左にいる黒人がたまたまクーベルタンフォーラムで中塚先生と出会った人でして、その人のツテで連れて行ってもらいました。

このようなエリアでは、海外で活躍して多額のお金を手に入れた選手が地元に帰って来て若い選手を育てるという流れもありますが、一方で普段見たこともないような巨額の富を



得て、人生を破滅させてしまう人もいるようです。日本でも活躍していて不審な死を遂げたサムエル・ワンジル選手もこのエリア出身です。彼の死について現地ではさまざまな噂が飛び交っています。ちなみに、私がトレーニングセンターを訪れた時には、たまたまシャヒーン選手というケニアからカタール国籍に帰化した選手と出会いました。

次に、この写真は、ナイロビの近くにある ウゴングというエリアでマラソン選手が留学 先のスウェーデンで築いたネットワークをも とに設立した小学校です。この学校には、ケ ニアとスウェーデンの頭文字を取って

「KENSWED」という名前が付けられています。たまたまナイロビでお茶を飲んでいる時にマラソン選手から声をかけられて開校式に参加させてもらいました。そこで大学の教員養成課程で教えられているスウェーデン人の先生と出会い、それ以降彼がスウェーデンの学生を対象に実施しているスタディーツアー



のコースに、私のリマンドホームを入れてもらっています。

マラソンについてもう1つ付け加えさせていただきますと、軍隊に所属していたり、警察に所属していたりと別の仕事をしながら走っている選手もたくさんいます。そして、若い人だけではなくわりと年齢の上の選手も大会に出たり、町のグラウンドで走っているという年齢層の広さも、ケニアのマラソンの特徴かと思います。

#### <バレーボール>

続いてバレーボールについてお話します。まずは、こちらの映像をご覧ください。これはバレーボールケニア女子代表が Africa Nations Cup で勝った時の映像です。私も体育館に行ってはじめて試合を見たのですが、おもしろかったのは、観客席で試合を見ていた人たちが試合が終わるとどんどんコートに下りてきて、表彰式に混ざっていることです。来ている人を見ると、選手の知り合いや協会の人など関係者が多いような印象を受けました。私もこの日は、右下の写真に写っているケニア人に誘ってもらい行ってきました。この人は、



Eduna という名前で、昔協力隊に習ったことをきっかけにバレーボールをはじめ、その後ケニア代表に選ばれ、現在はチームマネージャーをやっています。

彼女の話によると、サッカーが地域スポーツとして行われているのに対して、バレーボールは英才教育のスポーツという面が強いようです。各地でセレクションが行われ、優秀な選手がナイロビにあるエリートアカデミーに集められます。このエリートアカデミーは UNICEF によって運営されているようですが、ここから実業団チームなどに入り、代表選手にも選ばれるという流れのようです。サッカーの場合は、トップリーグでプレーしていた選手が引退して、地域に戻り、地元ユースのためにサッカークラブを立ち上げるという話をよく聞きますが、バレーボールの場合は、そのような動きはあまり見られません。その理由について聞いたところ、主に2つの理由があり、1つは、サッカーに比べてバレーボールはネットやボールなど用具と場所が必要なこと。そして、もう1つの理由は、引退した選手自身が、地域で育ててもらったという記憶がないため地域に還元しようという意識がないようです。

#### **<ラグビー>**



最後にラグビーについてお話します。最近、ケニア代表が急速に力をつけ、若者の間でも人気になっているのが、7人制ラグビーです。私も、ちょうどナイロビのスーパーでテロがあった日に SAFARICOM という携帯電話会社がスポンサーになっている7人制ラグビーのアフリカ大会を見に 行ってきました。バレーボールの観客がわりと年齢層の高い関係者風の人が多かったのに対して、ラグビーは若者が多く見に来ていました。

この写真の黄色い車が、チケット売り場です。 車の窓越しにチケットを購入します。1000シ リング(このスタジアムに来る交通費は50シリ ングくらい)という決して安くはない値段です が、かなり観客が入っていました。そして、な ぜか分かりませんが、入り口の列が男女別に分 かれていました。

ラグビーは「する」スポーツとしてではなく、 「見る」スポーツ、おしゃれなスポーツとして ケニアに入ってきているように思います。



## 5. ケニアでの活動内容

#### 私の配属先:リマンドホームとは

ここからは、私のケニアでの活動についてお話します。私の配属先は政府系施設である Malindi Children Remand Home というところで、私は日本語では「マリンディ児童保護拘置所」と訳してい ます。この施設には主に2つのパターンの子どもたちが収容されています。1つは、Criminal Case と 呼ばれる犯罪のパターン。窃盗やレイプなどの罪を犯したという容疑をかけられた子どもが警察によ ってこの施設に連れてこられ、裁判の結果が出るまでこの施設にいます。もう1つのパターンは Child Protection Case と言って保護のケースです。ストリートチルドレンとして徘徊していた時に警 察に保護されたり、両親が亡くなってしまった場合や両親はいるけれども面倒を見られない場合など 家庭に問題がある場合に、その子どもを警察が保護し、リマンドホームに連れてきます。彼らの場合、 家庭裁判所では親の育児能力や親権などを見て、彼らのその後の行き先を決めているようです。年齢 層は10~18歳ですが、ここの施設に来た理由や背景はさまざまです。そして、この施設を出た後に 行く場所もさまざまです。例えば、犯罪のケースでは、更生学校という全寮制の学校や、少年院に移 送されるケースもあれば、保護観察処分になり定期的に保護観察所に出頭することを条件に家庭に戻 されるケースもあります。中には無罪となる子もいますが、ケニアの裁判所はいい加減ですので有罪 という判決が出た子の中にも冤罪の子はたくさんいるのではないかと思っています。一方で、保護の ケースは、孤児院やレスキューセンター、別の親戚のもとに送られます。中にはまだ親に保護管理能 力があると見なされ、元いた自宅に戻されるケースもありますが、そのような場合結局問題は解決せ ずリマンドホームに再び連れてこられるケースもあります。

ここで1人の男の子のケースについてお話します。彼は12歳ですが5人兄弟の長男。ケニアには、子どもができて逃げてしまう無責任な父親も多く、シングルマザーの家庭が多くありますが、この子もお母さんと兄弟と一緒に暮らしていました。しかし、母親にも定職はなく、5人の子どもを育てるのには限界があります。そのため、長男であった彼は観光客の多いエリアに行き物乞いを始めます。母親は子どもが物乞いをしていることを知っていますが止めませんし、ケニアでは親に言われて物乞いしている子どもも多いと聞きます。そんな物乞いをしている時に警察に保護されてリマンドホームにやってきました。ケニアの裁判官は、子どもの出廷日にその子のファイルが見つからないからとリマンドホームに平気で戻すような無責任ですが、プライドだけは高く、この子の場合も、母親にはまだ育児能力があると見なされ家庭に戻されてしまいました。しかし、そう簡単に家庭環境は変わりません。結局、家に戻されてからしばらくして、再び町で保護され、私がマリンディを去る直前にリマンドホームに戻ってきました。このようなリピーターもリマンドホームにはいます。

さて、他にはどのようなケースでリマンドホームに来る子どもが多いか、子どもたちが置かれている危険についてご説明します。



親・保護者は貧しかったり、教育を十分に受けてこなかったため、子どもを育てる能力に乏しく、学校でも生徒 60 名に対して先生 1 名など先生が子どもを見きれません。さらに、政府や警察は私腹を肥やすことを優先して、無責任。そのような厳しい環境の中で、子どもたちは数多くの危険に脅かされながら生活しています。リマンドホームに来る子どもには主に次のような理由があります。

1つ目はドラッグ。ドラッグは日本よりも簡単に手に入れられる環境にあり、リマンドホームに入所していた子でも、ドラッグの影響で呂

律が回らなくなっている子どももがいました。次に窃盗。この窃盗とレイプが 15 歳以上に少年に関して最も件数の多い犯罪になります。Defilement というのは 16 歳以上の子が 16 歳以下の異性と性的な関係を持つことで、ケニアではお互いに合意があったとしても犯罪になります。中には殺人のケースで連れて来られた子もいました。

もう1つの保護のケースでは、ネグレクトという家庭で育児放棄をされ保護された子、虐待を受けていた子、これは特に村落部出身の子に多いことですが、早期妊娠のケースもあります。早期妊娠の場合、レイプを疑われることもありますし、妊娠してしまったけれども、自分たちで育てることができない。かといって、宗教の関係もあり、おろすこともできない。警察に保護を求め、リマンドホームに来ます。また、これは日本ではあまり考えられないことかもしれませんが、登校拒否する子どもを保護者や学校の先生が警察に更生を求めて連れていくことがあります。さらに、この図にはありませんが、家出というケースもあります。マリンディは外国人観光客が多いため、ここに来れば夜の仕事を得られると聞いた女の子が、片道だけの運賃を持って家出し、ナイロビなどからやってくることもあります。

このようなさまざまなケースの子どもたちがリマンドホームには収容されています。そして、リマンドホームにいる期間、つまり裁判にかかる期間は、ケースによってさまざまです。短い子は1週間しかいませんが、長い子は1年半以上いる場合もあります。この施設は日本では鑑別所に当たりますが、日本の鑑別所は最長でも収容期間は4週間と決められているようです。そのため、それぞれの子どもの人格を鑑別するという役割もあって、入所期間中は教育活動などは行われないようです。しかし、ケニアの場合は、1年半以上と長くいる子もいますし、特別な鑑別なども行われていないため、子どもたちは手持ちぶさたな状態になります。伸び盛りの期間を手持ちぶさたで過ごしてしまうことは非常にもったいないという思いが私の活動の1番の原動力になりました。

#### 個別学習から活動をスタート

協力隊の場合、配属先と求められる仕事内容は大まかに決められていますが、実際に行ってみると要請書に書かれている内容と実際の状況が異なるということがしばしばあります。私の場合も、要請されていたのは、主にスポーツ指導でしたが、行ってみたらグラウンドがないということでした。本当に狭い敷地で、子どもたちは裁判所に行くとき以外、その敷地から外に出ることができません。何をしようかと悩んでいる時に、私が目を付けたのは子どもたちの基礎学力の低さです。はじめに同僚から当時施設に1冊しかなかった算数の教科書を渡され子どもたちに教えようとしましたが、足し算や引き算などの基本的な四則計算がやり方は知っているが紙に棒を書いたり、指を折ったりしないと

できない子どもが多く、指を使いながら出した答えも正確ではない子どもがたくさんいることに気が つきました。中には、もう 10 歳を越えているに自分の名前を書けない子どももいました。リマンド ホームに来る前にほとんど学校に行っていなかったのでしょう。しかし、一方で、さまざまなケース の子どもがいるので、小学校を卒業し、中学校に進んでいる子どももいます。 慣れないスワヒリ語で 授業する上に、このように学力の異なる子どもたちを一斉授業で教えることはとても難しいことです。

そこで、私は日本で公文式で働いていた経験を活かして、個別学習をスタートしました。公文式をご存知の方はイメージしやすいかと思いますが、先生が黒板を使って教えるのではなく、子どもたちがそれぞれ、その子が少しがんばれば自力で解けるプリントを学習しながら、少しずつ難しい問題にチャレンジしていくやり方です。公文式には何千種類というプリント教材がありますが、ケニアにはないためプリントは手作りしました。このやり方を導入したことで、簡単なものでは1+1、難しいものでは方程式などを子どもたちが同時に



学習できる状況が実現しました。これまで、一斉授業ではついていけなかった子どもも一生懸命問題を解こうとしてくれました。がんばって考えて、自力で問題を解けた時の達成感溢れる表情は日本の子もケニアの子も同じですね。

リマンドホームにいる子どもたちは裕福な家庭で生まれたわけではないため、コネを使って良い仕事に就くということは期待できません。自分で手に職を付けるか、個人商店などをはじめて地道に稼いで行くほかありません。そのような時に、スポーツは下手でも問題ありませんが、基礎的な計算ができなかったり、自分の名前が書けないと、生活ができなくなります。そのようなことを考えながら個別学習の導入から活動をスタートしました。

#### スポーツができるように

その後、私がスワヒリ語やケニアの子どもたちに接することに慣れてきたのに従い、集団授業や体罰ではない生活指導、授業前にはラジオ体操、ゲストを招いてのワークショップなど活動の幅を広げていきました。そして、東日本大震災から1年経った日には日本語の歌「上を向いて歩こう」を子どもたちと練習して、仙台市にある元避難所の高砂市民センターで行われた追悼式にスカイプで参加させてもらいました。地震が起きた時間に仙台にいる方々と画面越しに一緒に祈り、ケニアの子どもたちの歌声に合わせて日本の方々が手拍子を送ってくださる様子には感動しました。



このように、できることはどんどん増えていきましたが、やはり私の頭に引っかかっていたのはスポーツのことです。狭いスペースでのバレーボールや授業前のラジオ体操(スワヒリ語バージョンを手に入れました)は行っていましたが、やはり広いスペースでボールを蹴りたい。子どもたちのストレスを発散させて、運動不足も解消したい。そのように考えるようになりました。そして、目を付けたのがリマンドホームの畑です。雨季の時期は、とうもろこしを育てていますが、それ以外の時期は、空き地になっています。そこに目を付け、草を刈ってグラウ

ンドを作ろうと考えました。しかし、同僚を誘っても、「面倒くさい」という態度でなかなか協力してくれませんでした。リマンドホームは子どもたちを安全に留めておくことが目的であり、畑でサッ

カーをすることは逃走のリスクを増やすことになると考え、子どもたちを畑に連れていくことを許可してもらえませんでした。しかし、同僚の中にもスポーツ好きの人はいますので、そのような人を巻き込みながら畑の草を刈り、ラインを引いてサッカーができるようにしました。サッカーができるようになると少しずつこれまで非協力的だった同僚も協力してくれるようになります。そして、とうもろこしを育てない時期は畑でサッカーができるようになりました。ガタガタで靴も十分にないため決して良い環境とは言えませんが、リマンドホームにとって大きな1歩だと私は思っています。

右の写真は、最近私が見て1番うれしかった写真です。何かと言いますと、私が日本に帰国した後に、同僚がFacebookに投稿してくれた写真です。私が帰って来てからも畑でサッカーしていることを報告してくれました。協力隊というのは一時的なスタッフであり、大切なことは協力隊が帰国してからも、同僚のモチベーションが向上し、現地の環境が良くなっていくことです。「協力隊がいた時は良かった」というだけでは悪くはありませんが、不十分です。そのような意味で、私がいなくても、子どもたちがスポーツをできる状況が継続していることはとてもうれしいことです。





#### 2年目 地域の人々のために

リマンドホームで1年間活動して、またマリンディで1年間暮らして感じたことは、リマンドホームの外にもリマンドホームに入所する子どもと同じような境遇の中で生きている子どもたち、いわばリマンドホーム予備軍の子どもたちがたくさんいることです。リマンドホームにいる子どもたちと町の中で厳しい環境の中で生きている子どもたちの違いはたまたま警察に捕まったり、保護されただけの違いであり、リマンドホームの中だけで子どもたちの生活環境を改善しようとしても不十分であることを感じ始めました。リマンドホームを1度退所しても、リマンドホームの方が生活環境が良いからと戻ってきてしまう子どももいました。そこで、2年目からは地域での活動にも力を入れるようになりました。地域の学校を地元のミュージシャンと回って Educative コンサートをしたり、サッカークラブの運営を手伝ったり、地域でもさまざまな活動をしましたが、その中で大きな節目になったイベントが、サロン 2002 や DUO リーグ(中塚理事長がチェアマンを務める高校生年代を中心とした地域サッカーリーグ)の支援もいただいて 2013 年 2 月に行った「Malindi Medical and Environmental Day」です。

#### Malindi Medical and Environmental Day

このイベントは、私の他に、病院や学校を回ってエイズ対策の活動をしている隊員と、国立公園に配属されていて環境教育の授業を子どもたちに行っている隊員がマリンディにはいましたので、隊員3名が中心になってマリンディの人々に対して、教育・健康・環境について考えてもらうきっかけになるイベントを行おうということで企画しました。

内容は、1000 名近いマリンディの子どもや 大人に参加してもらい、サッカー大会、各学校 生徒による「教育・健康・環境」をテーマにし た歌や寸劇などの出し物、エイズ検査、乳がん 検査、環境ポスターコンクール、日本文化紹介 などを行いました。リマンドホームの子どもた ちは、会場までは外出が認められませんが、リ マンドホーム内でポスターを一緒につくったり、 エイズのワークショップを行ったり、リマンド ホームで作ったものをイベントで販売したり、 リマンドホームにいながらでも地域とのつなが りを意識してもらえるように考えました。また、



りを意識してもらえるように考えました。また、リマンドホームスタッフには当日の運営スタッフと して手伝ってもらいました。

このイベントを行うためには、さまざまなサポートが必要なため、マリンディ内のNGOやレストラン、商店などを回って協賛を求めたり、学校を回って出し物の用意をしてもらったり、省庁でイベント実施に必要となる許可をもらったりと、ケニアに来て日本でもやったことがなかった「営業」の仕事をはじめてやりました。この過程でいろいろな人と知り合いになりましたし、同僚との関係も密になり良かったのですが、ストレスになることもたくさんありました。

例えば、省庁にこのイベントのバナーを街中に掲載する許可をもらいに行ったところ、「このイベントが営利目的ではなく、地域のためになることは分かったので、バナー掲載料を1週間分支払えば2週間掲載していい」というどこかのファーストフード店のようなことを言われたこともありました。スピーチをお願いしていた人に前日に断られるということもありました。

しかし、1 番衝撃だったのが、イベントの運営資金を持ち逃げされたことです。このイベントでは、 昼食にピラフという現地の食事を配布する予定で、800人前のケータリングを事前にジョージという ケニア人を通してお願いしていました。このジョージは、マリンディでイタリア人がスポンサーにな っているサッカークラブの現地代表をしている人で、今回のイベントでもサッカー部門の運営や現地 の人々との繋ぎ役として手伝ってもらっていました。ケータリングは11時半に届けられることにな



っていて、混乱を避けるためにイベント参加者には事前に食券800枚を配布していました。しかし、お昼になってケータリング業者が持ってきたのは400人前のみ。業者に尋ねても400人前の注文しか入っていないとのことでした。そこで、ジョージに状況を確認しようとしたところ、既に姿は見えず、電話も繋がらない状態になっていました。日本では、「足りなくなってしまいました、ごめんなさい」ということで謝れば何とかなるかもしれませんが、ケニアにおいて食べられると思っていた食事が食べられないことは暴動に繋がります。それは避けなけれ

ばいけないということで、1人前を半分ずつお皿に盛って全員が少しでも食べられるようにしましたが、本当にこの時は冷や汗が流れてきました。

実は、このイベントの前々日にも大きな事件が発生していました。当初ジョージのサッカークラブがホームグラウンドとして使っているグラウンドをイベント会場として考えていたのですが、前日にこのグラウンドのオーナーから電話があり、「グラウンド代を払っていないから使わせない」という衝撃の話が飛び込んできました。後から調べたところ、イタリア人がグラウンド代としてジョージに渡していたお金を彼が懐に入れていたようです。開催前々日でしたので、他に場所は確保できるか、確保できても既に大々的に会場を案内してしまっている中で、どのように変更を知らせたらいいか。電話を受けながら頭が真っ白になりました。結局、近くの小学校を無事借りることができ、当初開催予定のグラウンドから誘導もできたので大きな混乱もなく実施できましたが、このジョージの件を考えるとケニアで働くことが怖くなることがあります。

ちなみに、ジョージはマリンディではそこそこの有名人で、このイベントの2ヶ月後に行われた区議会議員選挙に立候補して見事落選しました。私が、運営資金を取り返すことに積極的になれなかったのも、この選挙の影響があります。曲がりなりにも選挙前の候補者をあまりしつこく追及して、彼の応援者から逆恨みをかってしまうのは命の危険も感じますので、結局取られたお金を取り返すことは諦めました。

このような衝撃的なこともいくつか起きましたが、このイベント自体に対する町の人の満足度は高く、ジョージ以外の人たちとは信頼関係も築けたかなと思います・

※ マリンディに住むイタリア人が制作した Malindi Medical and Environmental Day の映像がこちらからご覧いただけます。 http://www.youtube.com/watch?v=xnZ4t90Yiz4

#### **Malindi Community Youth Sports Association**

このイベントの後、ジョージがケニア人代表を務めるサッカークラブのバディリという名前のコーチが私のところにやってきました。「ジョージのもとにもういたくはないので、子どもたちを連れて別のクラブを作りたいと思う。手伝ってくれないか。」という話でした。私も、イベントの運営で相当精神的に疲れていましたし、ケニア人を信じられなくなっている部分も多少ありましたので1度は断ろうと思いましたが、地域の子どもたちの居場所を作りたい、生活環境を良くしたいという気持ちはあり、私が2年間のケニアでの活動が終わってからも繋がりを持ち続けるものが欲しいと感じていたため、小さくできることから始めることを条件に彼と一緒に地域での活動をスタートしました。そして、Malindi Medical and Environmental Day で急遽グラウンドだけでなく教室まで貸してくれたクンジェという小学校の教頭先生もメンバーに加わり、地域団体設立準備を始めました。この教頭先生は、ケニア人には珍しく海外研修でイギリスに行ったこともある先生で、頭の回転が速く、とても一緒に働きやすい人です。2月のイベントで急遽グラウンドが使えなくならなければ、出会うことがなかったと思うと、不思議な気がします。

さて、ケニアには Community Based Organization (以下、CBO) というものがあります。これは日本では NPO にあたるもので、役員数や定款などの条件を満たした地域団体が、役所に申請して CBO として認められると、銀行の口座がグループ名で開設できたり、さまざまな補助金に応募できたりという制度で、バディリ・クンジェとともに、私たちの団体もこの認証を受けることを目指しました。そして、保護者会や役員会を開いて 8 月に認証を取ることができました。その時に、私は役員に入ることを断りました。なぜかと言うと、先ほどのリマンドホームの話と同じように、私がいなくても地元の人たちで運営し続けられる団体の方が良いと考えたからです。CBO になると年に 1 回総会を開





かなければいけませんが、私がその時に現地にいられない確率の方が高いと思います。そこで、私はあくまでアドバイザーのような形で役員には入らないことを選択しました。

この会のはじめにサッカーのところでお話した、ナイロビの Mathare Youth Sports Association でバディリがかつてコーチをしていたことがあり、そこをモデルとした活動をしようということで、Malindi Community Youth Sports

Association と名付けられました。

このクラブの目的は、若者にスポーツ・教育・社会活動に積極的に参加できる機会を創ることであり、サッカーだけではないことがポイントです。

年会費 100 円を払った会員は、私が帰国する 時点で約70 名でしたが、当時から練習には会 員以外の子どもも参加していましたし、先日メ ールでバディリと話したところ、今は100 名近 く会員がいるとのことでした。

普段はサッカーの練習や試合を行っていますが、定期的にサッカー以外の活動も行っていますので、次に活動内容についてお話します。

#### **<サッカー>**

サッカーについては、マリンディにはユースの サッカーリーグなどはないため、地域のサッカー クラブを集めて大会なども行っています。さらに、 コパコカコーラというコカコーラ社がスポンサー の世界的な大会で、うちのチームがコーストエリ ア代表になり全国大会に出場しました。この全国 大会で勝ってケニア代表になると南アフリカで行 われるアフリカ大会に進め、そこでまた勝ってア フリカ代表になるとブラジルで行われる世界大会 に出場できるという大きな大会でしたが、うちの チームはケニア4位という成績で終わりました。 しかし、うちのチームでプレーしていた選手2名



がケニア U-15 の代表選手に選ばれ、選抜チームのメンバーとして南アフリカに行っていました。新



聞にも「KAMA MESSI (メッシのような)」 というタイトルで掲載され、彼らにとってもチ ームにとっても良い経験になりました。

もう1つサッカーについてお話すると、うちのチームには女の子もいますが、キリスト教の子どもに比べて、イスラム教の女の子の方が多くいます。普段は布をかぶって生活していますが、サッカーの時は外して、キリスト教の子と何変わらなくプレーしています。イスラム教の女性は、生活の中で制限されることが多い分、サッカーの場面で発散しているのかなと思うこともあります。

#### <クリーンアップコンペティション>

ケニア人にはポイ捨ての習慣があり、残念ながら町のあちこちにビニール袋や生ごみ、古新聞などのゴミが落ちています。多くの NGO がクリーンアップデーのワンデーイベントを行っていますが、その時は綺麗になってもすぐに元の状態に戻ってしまいます。協力隊でも、クリーンアップイベント



を行って、終了後に参加賞のビスケットを配ったら、そのビスケットの袋をまた散らかして帰ったなどの話が出ています。

そこで、ポイ捨て習慣を改善するための活動を行おうということで始めたのが、Malindi Clean Up Competition です。Competition なので競争です。ルールは、10名未満で構成したグループが、それぞれビニールゴミとペットボトルに限定して集めます。そして、Clean UP の日に重さを量り、よりたくさんゴミを集めたグループが勝ちというルールです。このイベントを毎月定期的に行うことにより、クリーンアッ

プデー以外でも、ビニールゴミやペットボトルを回収するようになり、ポイ捨てが減るのではないか

と考え、始めました。ビニールゴミとペットボトルに限定した理由は、これらがゴミの中で最も土に返りにくいものであるということと、リサイクルが可能であるという2つの理由から決めました。実際に、クリーンアップデーにはゴミを回収した後、リサイクル業者に渡し、ゴミをお金に変え、次回のクリーンアップデーに利用していました。

実施してみた結果は、小学校の環境クラブやサッカーチームが積極的に参加してくれて、中にはクリーンアップデー前に学校の周りを掃除してゴミを集め、「勝ち」を狙いに来るグループもありました。ワンデーのクリーンアップイベントに比べたら集まるゴミの量はとても多いと思います。そして、コンセプトが他のイベントとは異なるため、地元の政治家なども興味を持ってイベントに参加してくれることもあります。6月から私が帰国する9月まで毎月実施し、私が帰国してからもケニア人だけでやってくれたみたいですが、地域の商店を回ってスポンサーを探しての優勝賞品用意や、私がいた時には簡単にできていたイベント案内の資料づくりなども私がいないと難しいようで、持続性という面では改善の余地があると思っています。

## <地域の受け皿として>



このCBOを設立して最もうれしいことは、 リマンドホームを退所した子どもにとっての居 場所にもなっているということです。左の写真 で手袋をしている少年は、トーヤという少年で、 元々レイプの容疑でリマンドホームにやってき ました。非常に勉強ができ、気も使える中学生 で、リマンドホームの中でも他の子どもたちの リーダー的存在でした。その後、レイプの容疑 は晴れ、自宅に戻されましたが、父親は火事で なくなっていて、母親も学校に行っていないた め名前も書けないということで、なかなか仕事 が見つからず、トーヤの中学校の学費が払えま

せん。そこで、KESTES の奨学生としてサポートしてきましたが、CBO 設立以後は CBO のスタッフとしてもイベント実施時などに手伝ってくれるようになりました。そして、先日、リマンドホームにジッガーというノミの被害を受けている子がいた時には、このノミの症状が多いエリアに住んでいるトーヤに来てもらい、治療をしてもらいました。このように、CBO を設立したことにより、リマンドホームと地域のつながりができ、リマンドホームを退所した子どもの居場所になっていることはとてもうれしいことです。

#### <ワークキャンプ>

最後に私が帰国直前の9月に実施した活動を紹介して、ケニアでの活動紹介を終わらせていただきます。2年間の集大成として行ったイベントは、Malindi Youth Hope Work Camp という名前で行ったワークキャンプです。そもそも私が途上国に興味を持ちはじめたきっかけは、バヌアツ共和国で行われたワークキャンプに大学生の時に参加したことであり、そこで現地の人と触れ合い、サッカーの国際ルールが知りたいという村人に対してサッカー審判講習会を行い喜んでもらった時のおもしろさや途上国でも自分にできることがあるという気持ちが、今回の



協力隊応募に繋がりました。派遣国がケニアだったのは完全に JICA が選んだもので、私自身で選んだものではありません。しかし、2年間ケニアで活動し、普通では築けないネットワークを築いてきたので、ぜひ日本の大学生にも、私がバヌアツでしたような刺激的な経験をして欲しい、そしてケニアについて知ってほしいと考えワークキャンプを実施しました。募集をしたのが2ヶ月前の7月でしたので、参加者が本当に集まるか心配でしたが、知り合いの大学の先生や東日本大震災の時に知り合った仲間、協力隊の先輩を通じて、大学生を中心に日本人7名が参加してくれました。今回は日本人だけでなく、Volunteer Service Organization というイギリス版 JICA のような組織を通して、現地の無職の若者5名にも参加してもらいました。ケニア人のこのキャンプに参加する動機は、参加費無料で期間中の昼食が食べられるということもありますが、日本人と知り合いになれるということと、このキャンプで修了証をもらえば少しは就職の役に立つということだったのではないかと思います。結果的に、彼らがキャンプの運営にもとても貢献してくれて、日本人ともとっても仲良くなり、参加してくれて本当に良かったと思っています。運営は Malindi Community Youth Sports Association、実施協力は Malindi Children Remand Home という体制で行いました。

内容としては、はじめはアイスブレークの意味も込めて、日本人はスワヒリ語を、ケニア人は日本語を学ぶところからスタートしました。 小学校をしっかり卒業しているケニア人は英語も通じますが、彼ら自身の言葉を挨拶程度でも知っていると仲良くなる度合いが全く異なります。そこで、私がファシリテーターとなりお互いの言葉を知ってもらうところからワークキャンプをスタートしました。

そして、ワークキャンプは全部で10日間だったのですが、ケニア人と日本人を混ぜたチームを2つ作り、リマンドホームと孤児院、



Malindi Community Youth Sports Association でボランティアをしてもらいました。その時に、意識したことは、それぞれの特技を活かすということです。やらされのボランティアではなく、それぞれに何ができるかを考えてもらいました。その結果、サッカーが得意な人はサッカーを教え、ダンスが得意な人はダンスを教え、紙相撲を日本から用意してきてくれた人もいました。日本ではあたり前のこともケニアの人々にとっては新鮮であるということもたくさんあります。最終日には、全員で日本スタイルのカレーを作りました。





また、できるだけケニア人の日常に触れて欲しいと考え、ホームステイの日も期間中3日間設けました。普段、コンビニで何でも手に入る生活をしている大学生が土壁の家に寝て、ろうそくの火をケニア人と囲む経験は、とても刺激的だったと思います。ホームステイも受け入れたリマンドホームの副マネージャーは、日本に娘ができたと喜んでくれました。しかし、このホームステイも、私が2年間活動する中で、お金を持ち逃げされるなどの痛い経験もして、信頼できる人ができたからこそ実現できたと思っています。



キャンプ期間中の日曜日には、小学校にうちのクラブの子どもと保護者が来るということだけが決まっている中で、来てくれた人に対して何ができるかを、ワークキャンプ参加者に一から考えてもらいました。最終的に、大縄や二人三脚などの種目を取り入れた運動会のような「Kenya Olympic」を行いましたが、ケニア人

「Kenya Olympic」を行いましたが、ケニア人 ボランティアと協力しながら自分たちで作り上 げ、ケニアの子どもたちに喜んでもらえたこと に達成感を感じてもらえたのではないかと思い ます。

そして、キャンプの最後はマリンディから近い 国立公園に1泊2日で行き、観光大国としてのケニアの姿も見てもらいました。それまで、ホームステイをしたり、ローカルなケニア人と接していた参加者にとって、高級なホテルに泊まって、動物を見るという体験は、楽しいという気持ちが大きかった一方で、どこかケニア人の日常生活と乖離した部分に言葉にしがたい複雑な気持ちを持ってくれたようです。

私は、一般的なツアーでは分からない、このようなケニアのさまざまな姿を体験してもらうツアーをこれからも実施していきたいと考えています。



## 6. 質疑応答①

## ストリートチルドレンについて

安藤: リマンドホームにストリートチルドレンも保護されているという話がありましたが、ストリートチルドレンも違法なのでしょうか。

岸: 違法ではありません。リマンドホームには犯罪のケースと保護のケースで収容されている子がいますが、ストリートチルドレンは保護のケースに当たります。

安藤: ストリートチルドレンはたくさんいないんですか。

岸:ケニアではリマンドホームなどの施設ができてきたことにより、ストリートチルドレンの数は減ってきていると言われています。

安藤:彼らは親と一緒に暮らしてはいないんですか。

岸:親に行けと言われて町を徘徊している子どももいるようです。

笹原:そのような子はリマンドホームからはどのように出ていくんですか。

岸:裁判で親権や育児能力が見極められ、家に育児能力や保護能力がないという判決が出れば孤児院 や全寮制の学校などに行き、もし育てられるということであれば実家に戻されます。

中塚:岸君が働いていたのは、そういうところに行く前段のところだよね。

岸:そうですね。私のところに来る子どもにはさまざまなケースの子どもがいますし、私のところを 出てから行くところもさまざまです。リマンドホームに連れて来られたけれども、18歳以上だ ということが分かり、大人の刑務所に移される場合もあります。

#### スワヒリ語について

加納:スワヒリ語はいつどこで学んだんですか。

岸:青年海外協力隊は派遣前に2か月程の合宿研修があり、そこで文法理解も含めてある程度話せるようになりました。現地に行ってからも首都ナイロビで1ヶ月の語学研修がありましたが、あとは使いながら話せるようになりました。スワヒリ語はアルファベットなので習得しやすいですし、アラビア語などに比べたらずいぶん楽だったなと思います。

#### 物価・産業について

大和:サッカー選手の月収の話が出ましたが、ケニアの物価は日本の何分の1くらいですか。

岸:物価は3分の1くらいだと思います。

牛木: 為替は変動為替ですか。

岸:そうですね。私が赴任した当時は1シリング=1 円くらいだったのですが、今は1シリング=0.8 円くらいです。ビールは $100\sim150$  シリングくらいです。仕事を持っていないとなかなか出せない金額なので、気軽に飲みに行こうと誘えない感じです。

笹原:主要な輸出品は、紅茶・コーヒー・花ですか。

岸:そうですね。花はオランダなどに輸出されているようです。コーヒー・紅茶の産地とマラソン選手が多いエリアはわりと重なります。

笹原:工業はあまりないですか。

岸:工業はあまり聞きません。その分、修理技術などは高く、日本では廃車になるような車も現地で 直してどんどん走っています。靴の修理技術なども、日本では失われているような職人技がケニ アでは残っています。

## 7. ケニアから見た「スポーツを通した豊かな暮らし」

本日、最後のトピックとして、ケニアから見た「スポーツを通した豊かな暮らし」についてお話させていただきます。「スポーツを通して豊かな暮らし」というのはサロン 2002 の理念でもあり、「スポーツを通した豊かな暮らしづくり」は私のこれからの仕事のテーマにもなるかなと思っています。「スポーツを通した豊かな暮らしづくり」と、あえて「づくり」を入れた理由は、私にとってスポーツは豊かな暮らしを創るための手段であると考えているからです。サロン 2002 はさまざまな方がいらっしゃるので、私の捉え方とは違い「スポーツ」そのものが生きがいだと考えている方もいらっしゃるかもしれません。しかし、私の場合は、元協力隊である私が、スポーツを手段として、豊かな暮らしづくりに貢献できる方法があるのではないかと考えています。

#### 元協力隊として

少しスポーツからは離れてしまうかもしれませんが、「元協力隊」という部分について、まずはお話させていただきます。

私はケニアでの活動を通して日本にいたら絶対に築くことができなかったネットワークを創ることができました。協力隊として途上国の人々を支援しに行ったつもりが、現地の人々から教えられることもたくさんありました。右のスライドは、ケニアを去る時に職場で2年間を振り返るプレゼンをさせていただいた時の最後のスライドです。私は、ケニアは第二の故郷の



ように感じています。「豊かな暮らしづくり」と考える時に、むしろ日本より先に頭に浮かんでくる のはケニアの方です。

# フィリピン被災地支援

大きな組織ではできない支援活動を!!

- 東日本大震災後のボランティアでの経験
- 協力隊で築いたネットワーク
- ・協力隊の経験(政府は頼れないなど)





私はケニアで活動していたためケニアに対して強い想いを持っていますが、協力隊を経験した人にはそれぞれ日本と同じように自分の国と考えられる国があるかと思います。例えば、私は現在フィリピンで活動していた隊員とともに台風後の被災地支援活動を行っています。フィリピンの元隊員の中にはまさに台風の被害を受けた地域で活動していた人もいます。お世話になった人の消息が分かっていない人もいます。そのような人たちとともに、大きな組織ではできない支援活動を行えればと動き出しました。東日本大震災後にボ

ランティアをしていた経験から、政府や赤十字のような大きな組織の支援が届かない人がいることや、 そのような人に支援を届けるためには人と人との個人的なネットワークが1番の力になることは想像 できます。そして、途上国では政府が信用できないことや、支援がしっかりと届けられるべき人に届 かずに誰かのポケットに消えてしまうことも痛いほど理解しました。そのような状況の中でも、有効 な支援ができるのが、元協力隊であり、協力隊のネットワークであると思っています。

フィリピンの例はあくまで一例ですが、「スポーツを通した豊かな暮らしづくり」と考えた時にも、私は元協力隊ならではの経験やネットワークを活かして働く方法があるのではないかと考えています。

#### スポーツを通した豊かな暮らしづくり

下の写真は、ナイロビのカワングワレというスラムもあるエリアで、このクラブのケニア人や協力 隊員とともに実施したイベントの時に撮影した集合写真です。「スポーツを通した豊かな暮らしづく り」と考えた時に、1番イメージしやすいため、このイベントについて紹介させていただきます。

このイベントの内容は、13歳以下と15歳以下の2つのカテゴリーによるサッカー大会を中心に、朝はゴミ拾いからスタートして、試合を持っているチームにエイズ・環境・チームビルディングのワークショップを協力隊員が実施するという内容で行いました。サッカーだけを見たら、ボールは汚いものを使っているし、靴を履いていない子もたくさんいるため、そこから支援しなくてはいけないのではないかという意見も出て来るかと思います。事実、スポーツ関連の途上国支援においては、サッカーボールやシューズなど物を送ることが個人的な支援の中心であり、FIFAやIOCなどのスポーツ機関による援助でも、施設を建てるなどの物質的支援が援助の中心でした。しかし、デコボコのグラウンドでも、シューズを履いていなくてもこのイベントにおいて子どもたちの笑顔はとても輝いていました。

それは、なぜか。そこには大きな3つの理由があるのではないかと思います。1つは、純粋にサッカーができるという喜びです。ボールが汚くても、スラムでの厳しい生活から一瞬解放されて身体を動かすことができる喜びを感じているように思います。2つ目は、普段関わらない日本人や他のチームの子どもたちと関わることができるということ。3つ目は、新たなことを知ることができる、体験できるということです。日本人の我々にとっては当たり前のことが彼らにとっては当たり前ではなく、驚きや喜びといった彼らの気持ちに繋がります。

この日協力隊である我々がやったことは、一緒にゴミ拾いをして、ワークショップをして、空いた時間にはおしゃべりをするただそれだけです。ワークショップでは、日本人は先生役、ファシリテーター役にまわっていますが、そこに、かわいそうという感情はありません。それは、学校の先生が生徒のことを可哀想だと思いながら授業をしないのと同じだと思います。目の前の子どもたちにすくすくと育ってほしい、知らなかったことを知ってほしい、ただそれだけです。そして、それぞれこの日

のために特別な準備をしたわけではなく、持っている知識や気持ちを使っているだけです。この感情や接し方は、日本でイメージされる「支援」と少し異なるのではないかと思います。

しかし、そんな風に接しているとケニア人の大人にも影響を与えることができます。ケニア人の大人は日常的に子どもを見下した指導をします。自分の都合で指示命令を与え、体罰もあります。おそらく、自分たちが子どもの頃、そのように育てられてきたためでしょう。しかし、日本人が子どもたちと楽しそうに、しかし、注意する時は注意しながら子どもたちに接している姿を見て、ケニア人の大人も新たな子どもたちとのかかわり方を発見します。





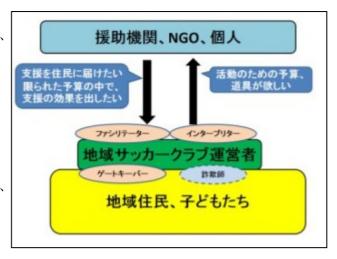
何が言いたいかと言いますと、途上国の豊かな暮らしづくりは、特別な気持ちやものがなくてもできるということです。私は、今後、日本人の「当たり前」を活かしつつ、その土地の実情に合わせた「豊かな暮らしづくり」が支援の主流になればと思っています。現地の事情と余りにもかけ離れた物やお金が流れてくると、それが先進国の人々から見れば、たとえ合理的であったり、正当なものであっても、それに慣れていない国の人には良い影響を与えるとは限らないということです。極端な例として、がんばっても靴が手に入らない人たちに一足のサッカーシューズを与える場合を考えてみてください。彼らに靴が欲しいかと聞けば欲しいと答えるでしょう。そして、靴をあげれば、とても喜んで受け取るでしょう。しかし、それが履けなくなった時、壊れた時に、彼らはどうしたらいいのでしょうか。どう感じるのでしょうか。ここまで、極端な例はグローバル化の進んだ今は起きていないかもしれません。ただ、先進国から見たニーズだけではなく、その国の日常生活に即した支援の必要性はいつでも、どこでも同じだと思います。

そのような支援を行うために、その土地の事情に精通した協力隊ができることはたくさんあると思います。しかし、協力隊以外でも、現地の人材を活用することによってできる方法はあると思います。その時に役に立つのがサッカーです。なぜなら、サッカーの場合、地域のクラブ運営者が勝ち負け、上手い下手ではない、サッカーの価値を意識して、地域の子どもたちの居場所づくりや地域開発のための活動を既に行っている例がケニアにはたくさんあるのです。このイベントを行ったカワングワレというエリアでコーチをしているカディリという男性も、スラムの子どもたちが学校には行けなくても、このクラブには来られるような環境を整え、子どもたちが社会から外れて悪い道に進まないようにということを目的に活動しています。マリンディで一緒に活動しているバディリもその一例でしょう。しかし、彼らに共通していることは、彼ら自身がほぼ無職でその日暮らしをしているということです。例えば、日本では地域の少年サッカークラブの監督や地域活動を積極的に行っている人は、別に仕事を持っている場合がほとんどだと思います。さらに、日本では少年サッカーから強いチームを目指し、時には子どもたちが逃げ出したくなるほど練習させているコーチもたくさんいると思います。私は現在、このギャップに注目しながら、現地の人材を活用した支援の在り方について修士論文をまとめています。

## ケニア共和国におけるスポーツを通した地域開発の実状 -地域サッカークラブ運営者の役割に焦点を当てて-

これが私の修士論文のタイトルです。事例として、カワングワレのカディリとマリンディのバディリの 例を使いながら、彼らが社会の中で果たしている役割と、彼らの不安定な日常について書いています。

簡単に紹介しますと、「支援を住民にしっかりと届ける」という使命を持っているが、その土地の事情を個人的なレベルまでは知らない援助機関が、しっかりと支援を届けられる方法を探っている一方で、地域のサッカークラブは、その地域で行う活動のための予算や道具を求めています。これら両者の利害関係は、地域サッカークラブ運営者が間に入ること

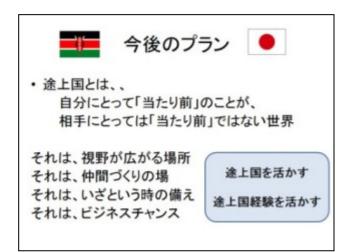


で一致するはずですが、ケニアの場合、その繋がりが非常に弱い印象を持っています。その理由には、住民のことよりも私腹を肥やすことを第一に考えている政府役人の存在や、地域サッカークラブ運営者にはジョージのような詐欺師とも呼べる者もいるということが挙げられるでしょう。しかし、ほとんどの地域サッカークラブ運営者は、ファシリテーターやインタープリターとしての役割を任せられると思いますし、実際に地域の中で大きな役割を果たしているため、彼らがさらに安定した生活を送れるようになることが、地域のためになるのではないかと考えています。このような考えを論理的にまとめようと、私は現在苦戦しています。

以上が、私が考えるスポーツを通した豊かな暮らしづくりの捉え方であり、方法です。

#### 今後のプラン

そんな修士論文を書きつつ、私自身も不安定な生活を送っていますので、最後に私自身の今後のプランについて、お話させていただき、今日の発表を終わらせていただきます。



簡単に言いますと、途上国経験や途上国という場所を活かして生きていきたいということです。私の中で、途上国とは、決して悲しい場所でも、不幸な場所でもなく、自分にとって「当たり前」のことが、相手にとっては「当たり前」ではない世界。ただそれだけです。しかし、その場所には大きな可能性が眠っていると思っています。例えば、途上国に行くことで自分には知らないことを知ることができたり、逆に自分自身を見つめる機会にもなり、視野が広がります。また、これまで関わったことがない仲間をつくることができる場所でもあります。私は

東日本大震災後にボランティアをしていまして、電気や水が十分に得られない状況に地元の人、ボランティア含め多くの人が苦労する現場にいましたが、電気や水が十分に得られないということは途上国ではよくあることです。そのような場所での生活を体験し、生活の知恵を得ることは、どこに行ってもいざという時の備えになります。そして、途上国の可能性を今後のビジネスに結びつけて行ければと思っております。

## ☆ ケニア、途上国の実状、おもしろさを日本で紹介

- → 学校等での講演
- → ケニアの商品の販売
- → 修士論文



☆ より多くの人が、より良い形で途上国に行ける 環境づくり

☆ スポーツ・教育を通した豊かな暮らしづくり 子どもたちが夢を持てる社会を作るのが大人の責任 具体的には、3つの柱を考えています。まずはケニア、途上国の実情やおもしろさを日本で紹介していきたいと思っています。例えば、既に始めていることですが、学校などでケニアや途上国の話をさせていただいております。先日は、これから途上国でのビジネスにチャレンジしようと考えられている蓄電池などを作る会社で、途上国の人々と関わる上でのポイントのようなお話させていただきました。また、はじめにも紹介させていただきましたが、ケニアの布製品の販売を始めています。さらに、修士論文も、途上国におけるスポーツ支援の在り方につ

いて提言できるようなものを書きたいと思っております。2つ目の柱は、より多くの人が、より良い形で途上国に行ける環境づくりをしたいと思っております。具体的には、旅行業に現在興味を持っています。より良い形というのは、旅行者にとっても現地の人にも得るものがある旅ということで、ケニアをはじめ日本人にはまだあまり馴染みのない国の魅力を日本の人たちに伝えていきたいと思っています。そして、3つ目の柱は途上国に限らない日本も含めた場所で、スポーツや教育を通した豊かな暮らしづくりに関わっていければと思っています。その1つが、このサロン 2002 の関わりであると考えています。

最後の「子どもたちが夢を持てる社会を作るのが大人の責任」というのは、先日あるJリーグクラブの社長が話していた言葉ですが、ケニア社会で私もまさに同じようなことを考えながら子どもたちに接していました。そして、日本に帰ってきてみて感じたことは、日本でも子どもが夢を持ちにくくなっている状況があるのではないかということです。暮らし方や社会状況は異なっても、お互いに欠

何かお手伝いできることがありましたらいつでも連絡ください。

岸卓巨 <u>takumi.kishi@gmail.com</u> ブログ「御用聞き、世界を渡る」



けている部分を補いながら、世界の国々がともに子どもたちが夢を持てる社会を実現していく。その一翼を担っていければと思っております。

そして、それは私1人ではできません。ぜひ、ケニアのお話をさせていただける機会やケニアに行ってみたい方がいらっしゃる場合、スワヒリ語の通訳を探している場合など、何かお役に立てることがありましたらご一報いただければと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。

# 8.質疑応答②

中塚: 非常に密度の濃い2年間ですね。どこを取っても、何回も飲み会ができそうですが、ここでは 残り10分程質疑応答ができればと思います。

小池:「スポーツを通した豊かな暮らし」というテーマであったので本日は参加させていただいたのですが、今のプレゼンの中でお父さん・お母さんの姿があまり出てきていないように感じました。リマンドホームの子どもたちのお父さん・お母さんの顔が見えないのは当たり前かなと思うのですが、「スポーツを通した豊かな暮らし」と考えた時に子どもだけではスポーツはでき

ていかない。そこのコミュニティがどのような形になっているのかがよく分からなかったのですが、その部分についてはどのように感じられましたか。

岸:自分の子どもにスポーツをさせようという熱心な親は日本ほど多くないように思います。ただ、ドラッグなどの危険もありますので、放課後何もさせないでブラブラさせておくよりは、スポーツをさせておいた方が良いと考えている親が多いです。シングルマザーも非常に多くて、両親揃って教育熱心という親は日本ほど多くないように感じています。そして、サッカークラブでは親が関わるというよりも、親はコーチに任せているという印象を持ちました。

小池:イベントを行う時には親は応援にいらっしゃるんですか。

岸:中にはいらっしゃる親もいますが、ほとんどが子どもだけで参加しています。

小池:そこが非常に断絶されているような気がしますね。私が持っているイメージとしては、スポーツにはそれが1つの核となってコミュニティを強くしていくという要素があって、それが外国人がいなくなってからも継続していくのかなというのは少し疑問に感じました。

岸:サッカークラブに保護者は来ないのですが、サッカーをしているとそこで子どもたちの顔色が 分かったり、自分の親ではなくても子どもたちが悩みを相談できる相手が地元のクラブの大人 だったりすると思います。そういう意味で、サッカークラブを通して人が集まっていることは 大切だなと感じました。実際に、サッカークラブでいつも元気な子が元気がなかったりすると、 そこから家の問題が分かったり、それがきっかけで児童相談所に相談が来たりすることもあり ます。

中塚:おじいちゃん、おばあちゃんの姿も見えませんね。日本のこれからを考えると、そういうことに気が向いてしまうのですが。

岸:日本と決定的に違うのは若者の方が多いということですよね。家に行けば、いたりはするんですけど。

笹原:こういう国では40代、50代でもおじいちゃん、おばあちゃんになるよね。

牛木: 平均寿命が 57.2 歳ということは、戦争直後の日本と同じくらいですよね。僕のおじいちゃん、 おばあちゃんは皆 50 代で死んでいます。だから出歩いていないのも当然かと思います。

岸:家事や家業が忙しいというのもあるかと思います。子どもと一緒に遊びに来ているほど生活に 余裕がないとも思います。

安藤: サッカーは大人は混ざって来ないんですか。

岸:大人は大人のチームでやっています。ただ、その大人も50代とかではなくて、20代、30代が 多いかと思います。

笹原:クラブではなくて道端で勝手にサッカーをしていたりはしないんですか。

岸:私もびっくりしたんですが、都市部ではあまりないんです。バヌアツなどでは、手作りしたボールで広場で遊んでいる子どもたちがたくさんいましたが、ケニアではそのような光景があまり見られませんでした。

小池:遊べるように作られた広場はないんですか。

岸:作られた空間はあまりないですね。この道端で遊んでいる子どもが少ない理由は2つあると思っていて、1つは学校がすごく忙しい。朝7時くらいから学校に行って、夜8時くらいまで勉強しています。小学校卒業した時と中学校卒業した時に統一テストがあって、そのテスト結果によって将来が決まってくるので、その試験に皆詰め込み学習をしていますね。

笹原:体育の授業などもないんですか。

岸:ありますが、自由時間的な要素が強いと思います。学校対抗体育大会のようなものもありますが、そこは学校の選抜チームを作って行きます。部活などではなく、学校でセレクションをしてメンバーを決めます。

道端で遊んでいる子どもが少ないもう1つの理由は、保護者が勝手に遊ばせたくないと思っているからだと思います。危険な要素も多いので、家にいるか、学校にいるか、サッカークラブにいるか、居場所を特定しておきたいと考える保護者が多い印象です。

中塚:誘拐みたいなものはないんですか。

岸:日本の愉快犯的なものは少ないと思いますが、遠くに売られてしまうようなケースはあると聞きます。マリンディの場合は、旅行者が多いので、遠くから連れてこられ、夜の仕事をしているところを警察に保護され、リマンドホームに収容されたという女の子には私も出会いました。

中塚:関谷さんは帰ってしまうんですよね。最後に一言いただけますか。

関谷:岸さんに久しぶりにお会いできて良かったです。なかなかこういった濃密な経験はできないだろうなと思います。志と行動力がすごいなと思って聞いていました。今日来られて良かったです。

岸:法律面でもすごく相談したいことがありました。

関谷:裁判官と弁護士のプライドが高いというのは日本も同じだと思います。

中塚:ありがとうございました。続きは場所を変えて楽しみましょう。